

第六場面 八組のまとめ

「僕」はとても勇気を出して母に告白した。母はあまりのショックと驚きと悲しみに落ちたが、悪いことをしたので母はエーミールにちようをつぶしたことにあやまりにいきなさいと背中を押し、「僕」はしかたなくエーミール家に行きあやまる気はなかったがいままでやったことを全部エーミールに打ち明けた。ちようを直そうとした努力とつぶした悲しみを改めて感じた。

長原拓未

「僕」は夕方までうちの小さな庭の中にいたが、一番の理解者である母に一切を告白した。そして母がエーミールの所へ行かなければなりませんと言、「僕」は謝る決心がついた。エーミールの所へ行くと、エーミールは誰がやったんだらうとちようのことを語り始めた。「僕」とエーミールは、二人でエーミールの部屋に行ったら、台無しにしてしまったクジャクヤマムユがあった。その時、初めてエーミールにクジャクヤマムユを台無しにしたのを告げました。

祐川竜也

「僕」は、ちようをつぶしたことが、心を握られていたような気持ちだった。そんな「僕」は、母にすべてを打ち明けた。母は、「僕」の気持ちを少し理解してくれたのか、厳しく、優しい言葉で「許してくれるように頼まなければなりません」と言った。でも、行く気にはなれなかった。でも、母が行きなさいと言ったので、「僕」はおそろおそろエーミールの家へ行き、ちようを見せてくれと頼んだ。エーミールに謝ることはできなかったが、「僕」がつぶしたんだとエーミールに告げることを試みた。

堀 瑞季

「僕」は深く落ち込み帰宅した。夕方までずっとどうしようと悩んでいたが、なかなか答えが出ず、母に相談することにした。母は驚き悲しんだが、息子を想い、良い理解者になってくれ、あえて謝りに行けとは言わなかった。「僕」は仕方なくエーミールの家に出かけていった。「僕」は、エーミールの口調やちようを繕おうとした努力の跡から、真実を話すのが恐ろしくなり、一番大切な謝罪をすることができなかった。

大野晃季

「僕」は、母に自分がしたことを告白した。母はエーミールの所へ行き、許してくれるよう頼めと言った。謝れとは言わなかった。だが、「僕」はエーミールの所に行く気になれず、夜まで中庭にいた。それを見た母は、今日のうちに行かなくてはいけないと「僕」をエーミールの所へ行かせた。エーミールを訪ねると、クジャクヤマムユに起きたことを語った。彼の部屋に行き、壊れたちようを見ると「僕」は壊したのは自分だと告げ、説明を試みた。しかし、そんなに簡単にはいかないだろう。

国枝まり

ちようはもうどうにもならないと分かり、悲しい気持ちに包まれながら帰った。「僕」は、勇気を起こし、母に一切を告白した。「僕」の最大の理解者である母は、「僕」の苦しみを感じ取った。そして、指導者として、母はエーミールに話し、埋め合わせをし、許してもらいなさい、と言った。しかし僕は、エーミールの家に行こうとしなかった。母に後押しされ、しぶしぶ行き、謝る気はなかったが、すべてを告げようとした。そして次の言葉を待った。

久保田真也

「僕」は、家に帰り、夕方まで悩んでいたが、ついにすべてを母に打ち明けた。母は自分の子供が許されない行為をしたことに悲しんだが、「僕」がこの告白をすることがどんなに辛かったかを感じた。そして母は「僕」のしたことすべてを受け止めた上で、謝りに行きなさいと指示を出した。エーミールの家に行くと、まだ誰がちようを台無しにしたかは分かっていなかった。「僕」は、台無しにしてしまったちようを見たいと言ひ、エーミールの部屋に着くと、どれだけちようを直そうと努力したかが分かり、どれだけひどい方法を直したかが改めて分かった。そして、僕がやったんだと、勇気を出してエーミールに告げた。

白木淳奈

「僕」は家の庭で悩んでいた。しかし、決心はつかず、母にこのことを告白することにした。母は「僕」が間違った道を歩まないように、優しく「したことを説明し、許してもらいなさい」と言った。やっと「僕」は謝る決心がついた。エーミールの元へ行くと、ちようをつぶしたのは僕だと告げ、謝ろうとは思っていたが、説明しようという思いが強すぎて、謝ることを忘れ、必死に説明した。

赤座利菜

「僕」は自分がしてしまったことを母に告白しようか迷ったが、ついに一切を打ち明けた。すると母は、今日のうちにエーミールの所に行きなさいと言った。そして「僕」は、エーミールに、自分がやったんだということを告げた。しかし、それは謝罪ではなく、自分のものを埋め合わせにより抜いてもらうように頼むお願いであったりして、「僕」は母に言われたままのことを、エーミールに告げようとしていた。

青谷有梨